

# 障がい者支援登山に関する取り組み — 全ての人に、登山の楽しさと恵みを —

前 田 隆 久（公益社団法人日本山岳会東海支部 ボランティア委員会）

## はじめに

日本の、国土に占める森林面積は約66%、先進国中第2位と言われており、誰もが認める山国だ。この恵まれた森林環境から得られる物心ともに多方面に渡る恩恵は言うまでもないが、その恩恵を、障がいのある人も、無い人も、老いも、若きも、少しでも多くの人に享受して欲しい、共に登山を楽しみたい、東海支部ボランティア委員会と支援して下さる支部員は、そんな思いで、委員会活動を行ってきた。

いただいたテーマは、「障がい者支援登山に関する取り組み」だが、前述の観点から、当委員会の活動は、障がい者支援登山に限らず多方面に渡っている。今回は、障がい者支援登山の取り組みを中心に、サブテーマ「全ての人に、登山の楽しさと恵みを」に沿った活動も紹介する。

## ボランティア委員会発足と二つの障がい者支援登山

障がい者支援登山の取り組みの歴史はボランティア委員会の歴史でもある。委員会の歴史と共に、時系列で紹介する。

日本山岳会が公益社団法人に移行して公益的な活動が求められる以前から、東海支部では障がい者支援登山を行ってきた。きっかけは、2001年秋、東海支部設立40周年の年に、SO愛知（現在はSON・愛知）（注1）からの要請で、県内の12~18歳のアスリート（SOのスポーツ活動に参加する知的障がいのある人たちの呼称）を対象に知的障がい者支援登山を行った。

アスリート1人に対して、東海支部員をリーダーに、家族、SO愛知のボランティア4~5人でパーティを編成。9人のアスリートと、三重県の鈴鹿山系入道ヶ岳（906m）の、沢や岩場もあるコースに挑戦した。当日は、危険箇所にはロープを設置したり、登山道の危険物を事前に処理する別働隊も含め、50人を越す大部隊となった。

支部員の主たる役割は登山のサポートで、アスリートに対する個別の対応は一律ではないので、家族、SOスタッフの力が必要となる。支部員、家族、SOスタッフのチームワークが安全な登山を可能にする。実施するまでは、「安全にできるのか」と、不安視する声もあったが、事故もなく第一回目は無事終了した。

この2001年のSO愛知との支援登山がきっかけで、2003年、支部総会での承認を受け東海支部にボランティア委員会が発足した。4人からのスタートであった。当初ボランティア委員会は、核となる中心メンバーを数人で構成し、山行毎に支援者を募って行っていたが、徐々に委員会の拡大を図り、2022年秋の時点では、28名が委員会に参加している。現在は、委員会メンバーを中心に、ボランティア支援登録者（約40名）、支部所属の東海学生山岳連盟の学生たちの協力を得て委員会活動を行なっている。

SO愛知との入道ヶ岳での登山は2006年まで続き、2007年からはエリアを鈴鹿・朝明溪谷周辺の山々に移して「山岳会と一緒に登山」という名称で実施。2010年にはSO愛知との登山10周年を記念して、朝明溪谷の山小屋に宿泊、一泊二日の登山を行なった。

## 1. 登山に関する調査研究

一日目、アスリートを含む参加者全員で火起こしから始まる夕食の準備、夜は、キャンプファイヤー。二日目に釈迦ヶ岳（1091m）へ登った。一泊二日のこのパターンは、アスリートが色々な体験が出来る事からも好評で、2019年、都合により日帰りに変更するまで続いた。2020年、2021年はコロナ禍で一旦休止し、2022年の春、三河の宮路山（361m）、五井山（454m）に日帰り登山で復活した。

知的障がいや度合いはまちまちで、登るペースもまちまちの中での登山、事前に個別の対処法はヒヤリングするものの簡単にはいかないのが現実だが、全員で登頂し、アスリートが嬉しそうにおにぎりをほおぼる姿や、最後に、彼らから「また、来年もよろしくお願いします」と言葉をかけられると、疲れは吹き飛ぶ。この山行が、彼らの成長に少しでも寄与してもらえればと願う。

二つ目の障がい者支援登山の取り組みとして始まったのが、視覚障がい者支援登山である。（支部では視覚障がい者支援登山をブラインド登山、視覚障がい登山者をブラインド登山者と呼称）

きっかけは、2006年委員会メンバーの一人が、全盲の登山者で、鈴鹿の山々、富士山、北アルプス、南アルプスの登山を楽しんでいる人を紹介された。同年6月、三河の碁盤石山（1189m）へ一緒に登山した。その後、熊野古道、雪山、2000mクラスの山へ、途中から全盲の女性の登山者も加わって個人山行を重ねた。

この山行を、是非、支部での公式行事にと、2008年7、8月、ボランティア委員会のメンバー数人と体験山行を行い、委員会メンバーから「視覚障がい者への認識を新たにするとともに、山歩きについて高い能力と適応力を持っている」と高く評価され、後の、委員会行事へと繋がった。

同年11月ボランティア委員会主催で、視覚障がい

者支援の施設である社会福祉法人名古屋ライトハウス情報文化センター（注2）発行の機関誌「みちしお」で公募し、ブラインド登山を実施した。ブラインド登山者7名の応募に、サポーター21名の総勢28名で、三河の宮路山・五井山に登山。初回は安全に無事成功した。登山の本番前には、前述のブラインド登山者に「視覚障がい者の山歩きはどういうものか」を、支部員を前に講演してもらい臨んだ。こうして、二つ目の障がい者支援登山が委員会行事としてスタートした。

この男性のブラインド登山者は、2008年度に日本山岳会に入会され、東海支部の一員となり、現在もボランティア委員会で活躍されている。女性のブラインド登山者も、現在は東海支部の一員で、わたしたちと山行を続けている。現時点で支部には4名の視覚障がい者が支部員として在籍している。

ここで、ブラインド登山の実際を紹介する。ブラインド登山は、ブラインド登山者を真ん中に、前後をサポーターで挟んで3人1組で登山する。ブラインド登山者は、前を歩く先導者のザックに触れながら、もしくは、ザックに取り付けた補助ロープかザックの一部を掴む、片手には丈夫な白杖（視覚障がい者用の杖）を握り、ザックの動きで段差と方向を感じ取りながら、白杖で障害物や段差の程度、登山道の状況を確認して登る。先導者は、大きな段差、大きな障害物、特に頭上の障害物や浮き石等を具体的に口頭で伝える。後ろを歩くサポーターは、微妙な足の置き場を伝えながら、登山道から外れないように注意する。3人1組のチームワークで登山するが、ベテランのブラインド登山者で、3人のコミュニケーションがとれると、一般の登山道では、ほぼ標準タイムで登れる。一般登山者でも躊躇するような岩場でも、注意を払い、時間をかければ、ほとんどの山はクリアー出来る。

登山中は、登山のための情報だけではなく、花、

樹木等の自然の情報、史跡、建造物等の情報、広がる景色等の情報も、耳から、手で直接触れながら登っていく。

私たちは、五感（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）によって必要な情報を得ているが、多くは視覚に頼った生活をしている、登山中も同じである。視覚障がい者は、失った視覚の機能を聴覚、嗅覚、触覚などで補い、さらに記憶力で補う。見えなくても、広がる山々の景色、森の景色を、聴覚・触覚・嗅覚で楽しみながら登山する。その姿に接すると、私たちが、普段いかに視覚に頼って登山をしているかに気づく、登山の新たな楽しみ方に気づき、人間のもつ無限の可能性に感動すら覚える。



真ん中にブラインド登山者を挟み、3人でチームを組んで行う「ブラインド登山」

ブラインド登山の経緯に戻る、当初は、公共交通機関を利用した登山であったが、2010年から、社会福祉法人名古屋市身体障害者福祉連合会が運営する大型福祉バス（定員38名）を利用した山行となり、一気にブラインド登山としての対象の山も広がり、参加人数も増やす事ができた。

これ以降、「みちしお」による公募と福祉バスを利用して、春と秋の2回、毎回30名以上の参加者でブラインド登山を行ってきたが、コロナ禍で2019年の秋、中止となった。2021年の秋から参加人数を減らし、コロナ対策を行い復活した。ちなみに、この

福祉バスは、障がい者と支援者との利用を前提に、名古屋市からの補助で運用されており、格安で利用できる。

2014年の秋には、二日間に渡り東海支部主催で全国ボランティア登山（障がい者支援登山）情報交換会を開催した。全国にある、日本山岳会の各支部（33支部）を対象に、東海支部で行ってきた障がい者支援登山を広く知っていただき、同じ思いで活動している他支部と情報交換を行い、これから取り組もうとしている他支部には参考になればという思いから実施した。

情報交換会には、4支部2団体が参加した。一日目は東海支部ルームにて、各活動報告を中心に情報交換会を実施、二日目は三河・猿投山（629m）を舞台に、ブラインド登山を行なった。

この時に講演をお願いした、名古屋ライトハウス情報文化センター原田良實氏（元所長）のお話を一部紹介する。「視覚障がい登山者にとって、登山は非日常であり、視覚以外の感覚を磨く場であり、豊かな経験が豊かな人生に続く。ともに山を歩む者との信頼関係の構築、人生での大きな財産となる。サポーターとして登山を共有する者にとっても、視覚障がい者との登山は、自分の障がい者感が、劇的に変わる瞬間の体験であり、視覚障がい登山者という新たな隣人との出会いであり、人としての幅を広げるものである。」

情報交換会は有意義な二日間ではあったが、残念ながら全国的という大きな広がりにはならず、2回目以降が開催されていない、8年たち、日本山岳会も公益社団法人となり、多様性をより重視する社会になってきている今、当時と状況は大きく変わってきている。できれば、また取り組みたい。

2016年秋、新しいコンセプトの視覚障がい者登山「ひまわり登山」が始まった。前述の東海支部に在

## 1. 登山に関する調査研究

籍する計4名のブラインド登山者が対象である。一般公募による春と秋のブラインド登山だけでは山行回数が少なく、もっと登山の機会をとということから、年6回くらいの山行をスタートさせた。

現在は、広く普及を目的とした一般公募の春と秋のブラインド登山と、支部在籍の視覚障がい者との「ひまわり登山」の二本立てで、視覚障がい者登山を行なっている。ひまわり登山は、10人前後の少人数のため、泊まりの登山とか、遠方への登山も行えるメリットがある。

### 全ての人に、登山の楽しさと恵みを

ボランティア委員会は、障がい者支援登山以外にも、「全ての人に、登山の楽しさと恵みを」という思いから、さまざまな支援登山を実施してきた。ボランティア委員会以外の支部での取り組みを含め、三例紹介する。

一つ目が、委員会の取り組みとして視覚障がい者登山よりも早い、委員会発足の2年目、2004年秋から取り組んだ「親と子のふれあい登山教室」である。

きっかけは、名古屋市内の私立幼稚園から、委員会メンバーの一人に、「親と子供の絆を深める教育への取り組みが奨励される昨今、具体的な実践カリキュラムとして、山登りに高い効果を期待できないか」という相談があった。山という素材は、課題解決にうってつけかもしれない。親子が同じ目線で向き合い、頂へ、という同じ目的に対し、励ましながら汗を流す。もちろん、そのバックグラウンドは、山である。不安もあったが、実施に踏み切った。名古屋からゆっくりと日帰りができ、登山時間は短くても、山らしい急登や谷もあり、頂上からの眺望も良く、さらに大勢で集まれる場所がある山という事で選ばれたのが、鈴鹿山系・尾高山(533m)だった。

第一回は2004年、幼稚園年長組の希望者を対象に、

園児10名、保護者10名、園関係者6名、支部員4名、総勢30名で始まった。年々、参加者が増え、直近では、2日間に渡り、3幼稚園を対象に約100組200人の親子、園関係者10名、支部員20名、総勢200名を越す一大行事となっている。現在は、コロナ禍で、2019年の秋以降休止している。

二つ目が、身柄付き補導委託登山で、「たんぽぽ登山」と称している。

2018年委員会4番目の行事として、名古屋家庭裁判所からの委託により始まった。補導委託とは、試験観察(問題のあった少年に対する処分を直ちに決めることが困難な場合に、少年を適当な期間、家庭裁判所調査官の観察に付す制度)中の少年に対して、少年の最終的な処分を決める前に、民間にしばらくの間少年を預け、少年の更生を図ろうとする制度で、試験観察に併せて行われる。

委員会では、少年の社会内での更正を促す機会を与えるという側面に共感し、一緒に山を登り、登山の苦しみを乗り越えて、登頂を成し遂げる達成感を少年たちに感じてもらい、山の大きく美しい自然から、ささやかながら、立ち直って行くパワーを感じてもらえればという思いから行なって来た。初回は、2018年6月、鈴鹿・朝明溪谷をベースに一泊二日で行われた。少年2名、調査官1名、ボランティア委員会から9名の総勢12名が参加した。初回は、雨のため残念ながら登山を森の散策に切り替えて行なった。低くてもいいので少年たちに登山を体験させてあげたかったが、やむをえない選択となった。それでも、普段自然になじむ機会に恵まれない彼らにとっては貴重な時間であった。雨上がりの森の中を一緒に歩いた時の、彼らの言葉、「緑がきれい、きもちいい」の一言に、自然の、森の発する力と、彼らの立ち直りへの可能性を感じた。天候には恵まれなかったが、少年をも含めた参加者全員の感想も良好で、

初回としては成功であった。

この時の方法で、2019年まで、春と秋の年二回続けてきたが、コロナ禍の2020年から休止、2022年春、日帰り登山に切り替え猿投山登山で復活した。

三つ目は、ボランティア委員会の山行ではないが、東海支部の委員会活動として特筆すべき活動の2013年に発足した「亀の会」を紹介する。

2021年の時点で日本人の平均寿命は男性81.47年、女性87.57年、65歳以上の人口は28.9%と高齢化社会に突入した。山岳会も例外でなく会員の高齢化が進んでいる。それに対応すべき、「歩けるうちは山へ行きたい！仲間と一緒に山を歩きたい！」という思いは強いが、「歩くのが遅く、皆さんに迷惑をかけるから・・・、疾患があり、団体行動には自信がない・・・」と、登山への意欲はありながら、参加を躊躇している高齢者に、登山の機会を増やそうという事から結成された山行グループ（現在は委員会）である。

参加資格条件は65歳以上となっているが、2022年の時点で、89歳を筆頭に、80歳代19名、70歳代24名、70歳未満8名、総勢51名となっている。毎月1回の定例山行と、数回の自主山行を、無理のない計画で、安全第一におこなっている。

「亀の会」の存在は、健康年齢を伸ばすのにも、大いに役に立っていると自負している。健常者だけの、若者だけの山ではなく、全ての人に山は解放されなくてはならない。ボランティア委員会の理念とも一致している。

### コロナ禍での支援登山の取り組み

「ウィルスは、社会の弱点を突いてくる」この言葉は、登山でも当てはまる。健常者はコロナ自粛期間中でも、単独、少人数で、行動範囲を狭め、交通機関を考慮し、感染症対策をとりながら、山に出か

けている。実際に山に行くかどうかは、それぞれの自粛の捉えかたの問題だった。しかし、心身に障がいのある人、問題を抱えた少年たちには、選択の余地もなく山に向かう事ができない。当然。コロナ前のように、委員会と一緒に登る活動もできない。他団体と一緒に行うということは、当然支部員以外の一般の人も巻き込むし、また、他団体にはそれぞれに独自の厳しいガイドラインがあって、コロナ禍、委員会行事は全て中止となった。

2020年に入り、委員会すら開けない日々が続いた。しかし、2021年、本格的な夏山シーズンが終わるあたりから、支部の「コロナ状況下での活動の指針」とは別に、ボランティア委員会独自の山行指針を定め、支部員だけで完結する山行「ひまわり登山」を中心に少しずつ動き出した。

- ・全体の山行人数を減らし、移動は密にならないよう留意する。
  - ・視覚障がい者登山の場合、原則、障がい者を前後に挟んで3人1組で行動するが、1組毎の間隔を開け、先導者を短時間で交代してお互いの接触機会を短くする。
  - ・山行中のミーティングはマスク、ディスタンスをとる。食事は、黙食を基本とする。・・・・・・
- ウィズコロナの時代と言われている今、今後もしばらくは、感染症と共に生きていかなければいけない今、山岳会のあり方も議論されているが、当委員会にとってはさらに切実だ。このような状況が続けば、また、今後、新たな感染症が発生した場合、従来の団体登山を前提とし、他団体と協力をして行う当委員会活動は、残念ながら難しい。
- 2003年の委員会発足以来、対象行事を少しずつ拡大して19年目にはいったが、コロナの時代は委員会のあり方も見直さなければならなくなった。
- 新型コロナ感染症の前のように、健常者も、障害

## 1. 登山に関する調査研究

者も、老若男女、山を愛する誰もが、共に、心置きなく、自由に山に登れる日が来る事を信じ、今は、一日でも早くその日が来る事を切に願うしかない。

### 最後に、ボランティア委員会メンバーの思い

ボランティア委員会のボランティアという言葉の本来の意味を考えると、語源はラテン語で、「自分から進んで〇〇をする」「喜んで〇〇をする」とある、日本では、「善意」「善行」「奉仕活動」と訳されがちだが、本来の意味は、「自発性」や「主体性」である。ボランティア活動の最大の意義は、「私自身が、気になること、放っておけないと思うこと」そこからスタートすることに大きな意味がある。

東海支部ボランティア委員会は、障がい者登山の支援という「善意の奉仕活動」を行うための委員会ではなく、もっと、主体的に「気になること、放っておけないと思うこと」を、自分達の好きなこと、出来ることを通して活動している委員会である。ここでいう「気になること、放っておけないと思うこと」とは、「自分たちの好きな山の素晴らしさを、登山の楽しさを、同じように多くの人たちにも知ってもらい、共に楽しみたい」ということであり、その実現のため、自分たちが好きで、得意な登山を通して実践している委員会である。「善意」「善行」「奉仕活動」というような思いは、委員会メンバーにはない。ボランティア登山を義務としてではなく、登山における弱者と、一緒に楽しんで登山しているサポーターの姿に、この委員会の目指すところがある。

ボランティア登山は誰かのためにだけでなく、自分の登山の幅を広げるため、新しい登山の喜びを見つけるための登山でもある。たとえ、低山でも、何度か登った山でも、パートナーが変われば、登り方が変われば、その都度新しく、楽しい。

視覚障がい者、知的障がい者、幼稚園児・・・

と、その対象は今後も広がる。それぞれの支援登山を行なっている団体で、歴史も実績もある団体は多くあるが、当委員会は、ここで述べてきたように、横断的に全ての登山における弱者との取り組みを、これからも行っていきたいと考えている。



ロープで確保しての渡渉もある、SON・愛知との取り組み「山岳会と一緒に登山」

### 注釈

注1) 公益財団法人 スペシャルオリンピックス日本・愛知

スペシャルオリンピックス (SO) とは、知的障がいのある人たちに様々なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を、年間を通じ提供している国際的なスポーツ組織。SOは非営利活動で、運営はボランティアと善意の寄付によっておこなわれている。

スペシャルオリンピックス日本 (SON) は、日本国内でのスペシャルオリンピックスの活動を推進する組織として、国際本部 (SOI) より認証をうけている日本国内本部組織で、スペシャルオリンピックス活動を実施、推進する組織として、都道府県ごとに地区組織を認証している。スペシャルオリンピックス日本・愛知 (SON・愛知) は、その一つ。独立した組織/団体として活動を行っている。1968年、故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバー夫人によって提唱され設立されたSOは、1988年には、国際オリンピック委員会 (IOC) と「オリンピック」の名称使用や相互の活動を認め合う議定書を交わしている。

注2) 社会福祉法人名古屋ライトハウス 情報文化センターと機関誌「みちしお」

名古屋ライトハウス情報文化センターは、2020年に創立60周年を迎えた視覚障がい者等への情報提供施設。その機関紙が「みちしお」。視覚障がい者向けの、行事のお知らせ、商品紹介、各種講習、図書案内など、楽しく役立つ情報が掲載されている。